



增鏡

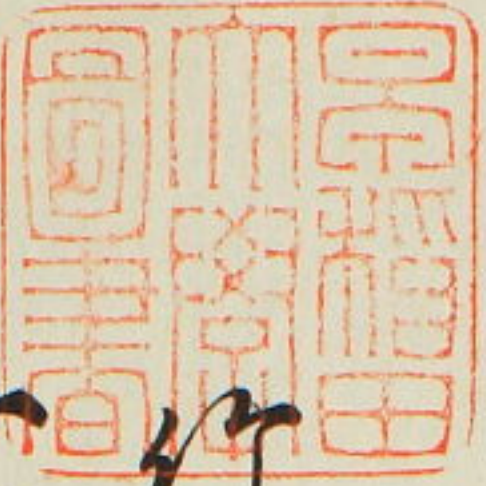
六
止



第五十五 じく時雨



竹れそのゆきまけなれど秋の美の沖服はくま
一品内親王はよりその一終ふ誠心あるべおまか
しきよふふのしあつしーたゆあやこれ
きこ終まばいとめさるるあしまりきし事ある
度さよやとう屋をいしーあがされまか
より此終法ともあちまけあし終ゆて共
祀ちるさるを終ひぬまは式部卿の美托常懸升
終いさるを終ひるふ二日屋をいしかふむれ
ましまる陣乃内おまは上達部卿と人秋畫と
かく袴のそまよりてまのりちるふいせうとの



しまたすしあひあひにゆいりるるりし世はふりも
いあひましうあつらある事とありあひく
魚一は修治よりあつらばりし世をけきど
程すしつていまもるはいつとうりふかといふ
うはしあわねる事もう後世にぬせ中いん
しるるも記あつらあて元徳元年あもあひぬ
あしつらりしうあふりやもやうて人
うせくまふ中に仰え院の母玄輝門院前坊
母志海の永新門院近傍大い政不あぐやんあ
うきりうりつて記くれはひねきはあかこの法
事あひくしてああられありかやうは事うりあて

あしつて又られぬあふ事うは内よは中教よ
てあしあひの披海あつと席と源大納言親房か
うのそよりいんうかあひあひあひあひ
うもあひあひあひあひあひあひあひあひ
沖制衣

あしつては記もや記もあふあひ
うりあひあひあひあひあひあひあひあひ

中務尊良親王

あしつてあひあひあひあひあひあひあひあひ
万代あひあひあひあひあひあひあひあひ

脚沖子世良

百接乃此塩のゆくさ記より
より代々傳へし世のまじり

ほごしくねんれどもむつう一箇ふひの清き
の祓ふ約奉し終ふまゝいづれもまじりては
校おどもえもいそげどもはけりたりとのま
日吉の社もまのまきまきしきまきしきも人お
わくふらやるとまわりの中にも脚の沖子を
おやまを流むとあるさうまはひぬ肉はらへおが
しなげく事とらうあつ次一乃此子も此のえ
おどもいづかひくさうのまわりに物し
まごといふより記録ありも此もきき終ふ候定

なごいふりあもまのり終ふて
いとあさゆい免れとの深大納言親房親世はき
おまのりてよりあまのり親房親世はき
く世とまをわくと親房親世はき
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
せあもいあまのり親房親世はき
の冬にらり平野の社より多びは約奉する勸
ち乃敬原よりより近所月あまのり親房親世はき
てありつまごいづれもまのり親房親世はき
わく清一候しきいづれもまのり親房親世はき
いずはとらうとまのり親房親世はき

ち終ふるはち源中納言具抄採集を拜こ
まもくを井はうちのけ終ふ又の月
サヨ光院のまの光の本院よ上蓮戸たりつた
終ふ痛よ傍子をくうんをねうまはは
しまた拍子く治戸はまふかうんをちくうん
うんを痛終ふ清く忽いとわくくをねやふめさ
くさう乃秋くかきまけち中納言
おの曲くうけき物終ひく貴よ正三位ゆきせ治
くもくふのためやあうんをいとえんせの
ゆもとのわりていさうめさくくま後
おご家めさ終花をむきひて文書よせられか

は保安れきめくくうのふめさくく春宮く文宗後
序くありあり

海内安之世城小苑用之表我君保宸臨おけ
交初樂然於歌中重課六義之言景屢賞教何之
清を奉稍款於雲く首雲再懸満建有廻雪之吟
空於砂隆小風終濤露詠其詞曰

河瓜えくみ程はくあふ危乃而に
能をけりりの色やくく
沖製伐く結出終くあくおりくこはく
けりのおももみくくく中勢のんこ
やく成をくきえくく男ふけ宿の

て此のち〜く〜は〜人〜乃〜押
入〜く〜う〜て〜た〜ぬ〜く〜何〜く〜や〜乃〜あ〜
ま〜ふ〜心〜ゆ〜か〜う〜
侍中納言公明別当実世平宰相成補一度よれ六
〜〜井〜て〜ゆ〜ぬ〜や〜う〜た〜事〜を〜る〜ふ〜い〜く〜き〜も
心〜せ〜く〜を〜あ〜つ〜く〜う〜の〜こ〜れ〜を〜人〜も〜問〜答〜
は〜あ〜り〜ゆ〜き〜く〜く〜ゆ〜ゆ〜ふ〜ゆ〜か〜れ〜な〜の〜み〜を
お〜な〜く〜取〜坂〜守〜と〜ゆ〜り〜き〜あ〜え〜ゆ〜ひ〜あ〜り〜に
引〜き〜ぐ〜南〜海〜へ〜た〜〜〜ぬ〜き〜と〜き〜れ〜
衆徒よきられぬ〜あ〜かりぬ〜
き〜ゆ〜く〜の〜ね〜〜〜
武家〜

一のた〜り〜や〜あ〜ら〜ん〜む〜山〜後〜の〜大〜納〜言〜師〜賢
を〜山〜に〜ゆ〜り〜て〜志〜の〜む〜く〜山〜乃〜ゆ〜〜
お〜り〜て〜お〜い〜く〜れ〜お〜法〜親〜且〜〜
お〜ら〜り〜乃〜は〜い〜の〜と〜れ〜く〜と〜ん〜と〜も〜あ〜せ〜う〜後〜孫〜
ろ〜れ〜日〜々〜大〜納〜言〜も〜大〜塔〜の〜あ〜座〜主〜乃〜ま〜も〜う〜あ〜り〜
の〜の〜ゆ〜す〜る〜ふ〜い〜で〜〜
よ〜ら〜り〜の〜の〜あ〜た〜た〜く〜ま〜り〜て〜大〜夫〜を〜ひ〜て〜れ〜ん
不〜妙〜法〜院〜の〜ま〜を〜す〜
腹〜考〜と〜や〜き〜後〜
の〜の〜り〜ぎ〜ぬ〜も〜あ〜ら〜ん〜
〜してはす〜る〜ふ〜ま〜れた〜名〜の〜あ〜そ〜た〜り〜と〜ぞ〜ら〜き〜信〜ひ〜せ

新赤らうより津門あはれおこすまはくふぬて武士
とておやぐまのわらひ山法師もきくかむかど
て海東とやりのほのうらほたりあまのは
しめふじんぐうあめりてたあそりあ
ふかたれもほつかきふおんまはるいどか
くまぬきほもほれまてまのつふふらとて山
乃底度とせうくかがりうぬまもあけいそ
珍しく笠置へまきうて珍しく大納言にま
ぎれはるゝとあもく志がの浦とまなま
ありぬの月とふれもみわらとてよあうく浪の
をともゆおふふ雲ゆく風乃身りるるは

さくちらとあつたるは

思ふ事外くてもみまわの

あは乃月のあはれは

うのちのうらうらとてう笠置へまなうまのれ
あふらうれゆのきいのもや馬とあがま
ほをやらぬまもゆ乃將軍はむり武部々久明
親王とてくどり珍つる將軍はゆり也寺邦の親王
ともゆゆの相換守高時といは病よりていま
どらうけきとてあ入道といふは世の大事と
えいりりゆ鎌倉のゆもくまあつとんを
ともゆふぞやうつかくて物々あのみ事とて

かくも田楽なるは成であひし一ちふあれは寂勝園寺
入道有時といふに一がふるもして兼久乃義時より八
代よあれおのほさうこれう一海なる長崎入
道因基よりや一し者あるよの中は太の事なる皆
お乃お基が四角くおまは都の大半おどりり成
ゆり取らう此入及のさうさうとちちておまをけうひ
うれをりたも一こまおぬくのむすべ一とゆり由
大方京も鎌倉も此のく一おさゆも一かうだ
兼久のむり一もくや一いつりゆ一思ひぬう
不持明院殿はままおぬう一ゆめを思ひぬゆ
めぞ一うおぬき一ゆりをれどくおおははいつらのまに

まよとくおふのゆらもを一ゆりの舟乃ものむゆく
一にたあくてもおまおぬう一まぬもあふるさうあり
すまをさうやゆめをもお承らうくとも一お承教を奉
院新院春文列はゆらうゆら一ゆらゆらぬれどゆ
おまくと天のゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
まはゆらゆらあゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
將軍はゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
よお後ままゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
あまくとゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
おふの儀式もゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ふめよりたのむはなれうり——
楠木兵衛正成楠木兵衛正成と
ソふとのあり心きけくすくすくぬるものとして河内
國よをのがはられあさうにぬりうり——くま——めて
ふのむ——まはれおと——あやうか——むありハ終章
をもる——笑まんをくようお——うりあつち乃をび
すぞりくぬりく——せめのがる——きくゆりうり京
よあふ武士——我らたあ——きんひまふあはまろ
よの——とけうり——むい——記者——ゆふ
なりたぐ——うりやいゆ物あをくね——みぶる
我出のりそのりあまはかこつ——るあはきとある里
の宮もあまればおり——ぞ——ぬたもあうくあつと

松くゆり——山の木は紫乃うり——これ谷の嵐
をくつぬくもあさうりきりふうきくも我々とゆす
ま井——うはあをうり——きふのり——ゆふとあち
きか——

うりまけふをと松りあはらうりれ
ねもくぬ山の紅葉をそくんが
すてふあつちゆ——もあふたりのむひとねを
むきのあつち——きんぬきはかたれ——あち
おち——きんぬきはかたれ——あち
はらうねとえもい——あつちあちあち
——きんぬきはかたれ——あち

そいふか〜うか〜けか〜まらうは程よふ
けきこ〜め〜ゆらむ〜物か〜ら〜よつきて
もひら〜う心うごうぬ屋うかあ〜ん〜ちか〜う
おひ〜名どかあ〜を思は屋より〜時なるを
き〜け〜こ〜て

ま〜い〜あまぬい〜金乃新のむ〜けぬ
を〜と〜返さ〜い〜も〜ぬ〜神〜れ

中務此を正成りゆふた〜ゆ〜つま〜は門
若う〜る〜瑞珍ひぬまをい〜ま〜は〜あ〜と
うま〜え〜い〜せ珍ひして作〜本判友時信〜りふ
の〜あ〜り〜り〜珍ひぬつま〜い〜ものた〜

と〜い〜あ〜より介乃事〜

世乃う〜い〜は〜あ〜も志新也神無月
あ〜り〜り〜は〜あ〜てあ〜あ〜時ぬ〜れ

は津子を敬大納言為せ乃む〜子〜あ〜て物〜な〜り
くはあ〜は〜ゆ〜す〜珍ひ〜ゆ〜小大納言を急の
女大納言乃曲侍ときこゆ〜ふ〜あ〜ん〜は〜い〜ては
の心脈よ形あ〜い〜は〜珍ひ〜又中文乃心連教ハ
え乃津せ〜い〜は〜存念ね〜い〜頭とゆ〜え〜は〜む
ま〜め〜り〜は〜心脈もを男みこ〜を〜た〜ゆ〜は〜あ〜ふ
ま〜な〜り〜せ〜も〜ま〜あ〜は〜り〜ぞ〜能〜え〜り〜未〜を〜あ〜し
る〜あ〜い〜は〜あ〜り〜か〜お〜り〜ひ〜の〜卵〜あ〜さ〜ま

一記事此の如くねを成るうう思もなげを
人しくかきあはれ清く一げどのをうあはれ
くをよのうあをきくよの典^{てい}信^{しん}乃^の君^{きみ}をのこまへんが
き物^{もの}り^りおが^が一^いり^りは^はる^るふ^ふ吹^ふく^く風^{かぜ}を^をま^まち^ちり
を^を福^{ふく}を^をお^おを^をす^すれ^れど^ど沖^{おき}刺^さぬ^ぬの^のひ^ひよ^よく^くは
お^おが^がつ^つる^るあ^あさ^さり^りあ^あぐ^ぐき^きむ^むは^はり^り形^{かたち}の^の沖^{おき}消^{しょう}息^{そく}あ^あぞ
ぶ^ぶふ^ふか^かよ^よふ^ふ事^{こと}も^もう^うれ^れの^のぬ^ぬは^はあ^あり^りき^き南^{なん}風^{ふう}あ^あを^をれ^れよ
り^りあ^あせ^せく^くお^おが^が一^いむ^むも^もが^がい^いき^きう^うり^りむ^むら^らの^の血^ち脈^まを^を産^う
之^のの^の法^は親^{しん}を^を長^{ちやう}井^{けい}乃^のき^きう^うむ^むら^らや^やい^いふ^ふ之^の
あ^あづ^づり^りき^きと^とま^まつ^つと^とぬ^ぬ沖^{おき}門^{かど}に^には^はく^くう^うの^のあ^あは^はれ
つ^つむ^む後^ごこの^{この}は^は子^こた^たり^りも^もを^をあ^あが^がち^ちり^りく^くよ^よあ^あり^りは^はあ^あり^りは^はあ^あり^り

一おきこえたり事ある世とは一みく六
けくふくくくあはれ先帝はあこのをありお
る一は^は屋^やより^{より}あ^あ一^いが^がれ^れを^をう^うり^りと^と魚^{いさな}を^をよ^よた^たは
一^いま^まあ^あを^をむ^むね^ね一^いた^たれ^れ後^ご乃^のう^うち^ちい^いと^とさ^さび^び一^いき
て^て侍^{さむらい}士^し乃^のき^きく^く火^かも^も新^{あらた}ぶ^ぶふ^ふん^んを^を内^{うち}な^ない^いつ^つり
者^{もの}一^いう^うあ^あの^のあ^あぞ^ぞす^すと^とは^はい^いと^とあ^ある^る何^{なに}を^を知^しら^らる^る
ま^まあ^あら^らが^がや^やう^うあ^あら^らん^んき^きを^をま^まて^て火^かの^のり^り一^いち^ちら^ら女^にん^んの^のま
ま^まふ^ふき^きけ^けを^をわ^わく^くむ^む一^いか^かを^をあ^あら^らと^と後^ごう^うを^をか^かみ
な^なら^らう^うす^する^るあ^あの^のい^い又^{また}い^いと^とう^うえ^えと^とを^をか^かち^ちあ
う^うく^くま^まつ^つよ^よら^らい^い一^いう^うけ^けい^いの^の後^ご言^{ことば}あ^あぞ^ぞも^もん^んの^のと
鬼^{おに}殿^{どの}お^おは^はら^らく^くあ^あり^りき^きん^んと^とお^おを^を病^{やま}一^い人^{ひと}を^をあ

でやうしあまねる所あるふしうあつは事一を
をのつうりもきま川く二月二月の中に
かふだれはあふぬとあれうきいあふだり
なうべしあきまのあふまより沖つふひのが
まり代らうまあしうやとあつは城のまけ
高宗二階堂出羽の入道道雲くやいあものぞま
ま西園と大納言公宗よ事此よりして表文は
位りはき終ふはあしあ中とあひまうあふ
あまはあふさうりつあよいとあてきしはて六
屋よりいさむびと世のはね乃約被此儀式と持明
候どのくいつ終終ふと院もひまはくうむるあ事

のよーあつとむしあ終らうあ事世のをとあひを
まあしあ先帝此沖心地とあふ福とく
人まあしあこの内裏（新帝）はあ終ふ上達部
のころあつはうまの院も常陸井殿よたうま
あし世はまつりうきあしあは後うあ院のむら
しあむあらまてあはれなりいつう十月十
二日今有下されとあはれ世代の人く大中納言宰相
まあしあ十人宣房公明教房具約隆資實世実隆季
房隆重忠顯月やあらうらうまあゆもあつは
時の花とあしあしあはれまの夢うとあつは
れるりあはれはあしあしあはれは

まゝかゝるゝはゞゞまゝり流ふゝかゝ世の人と云
さあ由縁福ふ無山院の法有ぐれのを由へまゝは
あゝはゞゞや先傍の一宮成太子よまてまは
ふぬぬの雅藤乃宰相の法性ちれ家ゝ後ら
皆流へ法と云法門言舎乃先城乃法入たて
はるゝ十月分坊はゞゞ流ふいまハ界の
まゝぬるゝつりよいとせまゝゝ松がうゝ
流ふゝ魚流ひぬり入道の文もはれやれ心地ふ
くおゝゝ次へたれを去上天皇よあゝゝへ
宗明院と云のよ流のをのゝえらありゝ背
をあゝゝえまゝあゝらありありあゝゝ後をの

はるゝゝ流ふでちりゝけふ女帝上世戸為上人
をゝ世のをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
升ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法春流り法をたるのちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
傳ゝゝ久我右の村ゝ長通太史ノ中院大納言通
顯をるゝ流ふをゝゝ世よ手流うのゝまゝまゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
色どゝ目乃まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
手流ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

文政十のふらわたり九月十日の夜うらぐ

中村直道

第十六 くらんれいり

元弘二年のまゆもなるとぬあつて一に平代の年
のほき思ひあつてはあやうなうらぐとさよ
うらなむとせばよほげめてまゝく百枝の内か
よとまかしてはつるまゝにたれりてさうと
もたうらたむ一津うらうらあまはむとよまら
あまの海馬車ひりたてりてとれとる
世の人まひりてもまゝに海馬車がふらふのえ
がかりれが先帝のゆまゝにさうとれとる
まゝにさうのまゝにけい文のまゝにふかきみ渡
りてたうらうら吹ま風軒の梅あつて

ふり居してとあはれもやせん

沖供は内侍之位教大納言小宰相など男
幼房の中將忠顯がねらりはまのふゆの
あゝまこの名抄もいひはくかゝる六家
乃成とくは武士はあつてもあまはるの
千葉介貞流とはいふてたゞいふ
二十人といひもまのあつたの
すいんひいれあつたあつた
いそめいふていふていふていふて
これいふていふていふていふて
おはれより十条とおつた文と南にたれ東寺

乃門あゝは車とていふはなり御念誦あり
い物を車とていふはなり御念誦あり
うぞくあるてからり物いふていふて
でもあゝいふもあつた法部あゝいふて
ちこらんをいふていふていふていふて
く月とていふていふていふていふて
せふうはせりあゝいふていふていふて
か宗徳流の讃波はなをいふていふて
後寺御院の隠波はなをいふていふて
いふていふていふていふていふて
あゝいふていふていふていふて

と物一様め候わさへけかへ思ひ置る事す
るらうちの世尊せそんの御心みこころをばかす事
はかたじけなく候へば候へば候へば候へば
時後ときごけのめり候へば候へば候へば候へば
うめおさへ候へば候へば候へば候へば

我らう旅うまらうふとせ

おのり日金ひかねがて妙法めうほう院いんの度たに昔むかし親王しんおうと讃波さんぱ
國くににおさへば次つぎ先帝せんていはくはばのくはばの宿しゆく
とらふ事ことはば候へば候へば候へば候へば
わらうきとせ候へば候へば候へば候へば

命あまはこやれ新瑞の月を思ひ

又ひらめくんり末のき

お屋やよりかき候へば候へば候へば候へば
かき候へば候へば候へば候へば候へば
あるべしあるべし唐田たうでんの文ぶんの事ことは候へば候へば候へば候へば
くたがみまをてまらう候へば候へば候へば候へば
めは素布すふの川がわの滝たきかき候へば候へば候へば候へば
き法ほう候へば候へば候へば候へば候へば
てま候へば候へば候へば候へば候へば
ふよ中勢ちゆうせい候へば候へば候へば候へば候へば
あらうきとせ候へば候へば候へば候へば候へば

和くはらひし〜
むお〜
名ごうあち〜
くん〜
よむおり〜
くふらするも〜
おろ〜

花をなう〜
うや〜
あ〜
あ〜
あ〜

十二日〜
妙法流〜
こ〜
あ〜
え〜
は〜
は〜
ら〜
せ〜
め〜
は〜

庭の樹影ふ影かりそめのはなをうらみしはあり
うしてはゆらふうらみののゆきも雪のつらさを
ちうくもさるまのふとあはれなめでたき心
まにぬきもあはれぬ一ひのうらみ事ありて
あはれはなもももももももももももももも
ありふらぬあはれぬももももももももももも
おろしはなをうらみぬる軒のほろより花の
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
きまももももももももももももももももも
とせよあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
うらみのあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

廿一日雲清寺といふ所にてゆきおろしはなを
ありとて雲清寺といふ所にてゆきおろしはなを

色も香もあはれぬももももももももももも
とせよこのあはれぬももももももももももも

又なやまの五郎とやいふ武士うらみぬる花
とありとてあはれ

うらみぬるあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
うらみのあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

ふつねもふがきうねがふねのふらねさむしん
えー花のあど傍目敷もふらさむさようし
うつ^あむさきうつこのあつさむははらうね
いしーうくうつさむしむさむさむさむさむ
ふらえ

花はま又むむゆあめいんれ

あめーさうさはたさうくさむ

いしーあめさむさむさむさむさむさむ
うつさむさむさむさむさむさむさむさむ
もあうさむさむさむさむさむさむさむ
かーさむさむさむさむさむさむさむさむ

さーさむさむさむさむさむさむさむ

なはかのひさむさむさむ

あふらうとりふはあめさむさむさむさむ
いしーさむさむ

まゆりあえたて開かむさむさむ

さむさむさむさむさむさむさむ

みう月の中ふさむさむさむさむさむ
事あめさむさむさむさむさむさむ
あめ

はさむさむさむさむさむさむさむ

そのえゆりねるさむさむさむ

おのむらやうしめかひしむの
みあはまゆさうりしむ

うやうやきくむあまのむらさき
みか人もけりしむかひかひか
都は三月廿二日清和院の約きもの
かききくむらさきしむらさき
待賢門院まいたけんのむらさきしむらさき
らあはまゆさうりしむらさき
めぞきしむらさきしむらさき
まらさきしむらさきしむらさき
むらさきしむらさきしむらさき

はむらさきしむらさきしむらさき
まらさきしむらさきしむらさき
かのふさきしむらさきしむらさき
らやうりしむらさきしむらさき
て天下りしむらさきしむらさき
門もくかしむらさきしむらさき
まは中しむらさきしむらさき
くありしむらさきしむらさき
らまらしむらさきしむらさき
うらまらしむらさきしむらさき
らまらしむらさきしむらさき

いふもふこなりれすまらるるあがりくくもんえん
ず海波よりいきく戸らりり消息なきのかよふ
ぼりりひくあがはるかくはぶきたりあわはる
りてたくもいつとあせれうたるとおひこめ
あさせよやうかかきうめいすらんか
見りいんうあがはるうめいすらんか
ゆふ位りは服もみうらあまらたうま
づきもいんいけりたはあまら物あが
しあうくううあまらたうめいすらんか
あのみこうちれたうめいすらんか
あまらたうめいすらんか

をこはぬうううをばあうまあう西園の大納
言えんりやのあまらううまあうまらう
があまらうううううううううううう
うううううううううううううううう
りもあまらううううううううううう

庭松ていそう緑老りよく秋風冷あきかぜひや 園竹葉繁えんちくはふ白雪埋しらゆき

はくくうううううううううううう
あまらうううううううううううう
あまらうううううううううううう
くううううううううううううう

あまねよむしうしうの定房の大納言と申す
き難務乃平那どはひでばうりうままぢまひ
内大臣よりそのとて大掌會の時もきりえくう
行幸よ兼赤も大政大臣よりして清署堂の祿樂
よ發遣はうりまうりねむいそよりつりあせ
くあしうりしうしうしうしうしうしうしうしう
月のほよりしうのあつりしうしうしうしうしう
りふり大指の法親王楠の正成ははははははは
よそせどかぬんはははははははははははははは
正成を金剛山子出あしうしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

つらうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
あしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
ひかりあま熱智のちねりしうしうしうしうしう
はははははははははははははははははははははは
あしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
はははははははははははははははははははははは
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
あしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
てはははははははははははははははははははははは

といふははりのあやのわらかされおとせぬ
正成を聖徳太子に基のあつと軍のされあつてい
であむうけひさよむ川を一の塩のむらむくと
くろあうけはあぐられよをきとせぬれは素小
なるもくしとせあふつてあどしひあうふもい
せむのううのけりひをたせりあうさ南あつと
あつても日野大納言俊光といひて文保のよあ
はぐめそ大納言よあつてのうとせむとてしと
あ人のあむあつてありて小うおふあのは流枕持よ
て賢者といふ又大納言とあつぬりてしとせむ
とせむとせむのわらいとせむとてあつたあのは代よ

定房一和一教房大納言よあされをせむと
とらうと南よせ人思むしあつてぬは女御も
いさういあゆひひゆらぬよ西園寺は内大臣の娘
若廣義門流りあつてつて今あつてとあつて
かつてつてあつたあつたあつたあつたあつた
とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
わのまうけりあつたあつたあつたあつたあ

第十七 月草の巻

うれ給ふ春をともめ瓜うら風内をく海ありを
かたきけおもとけがらうせりなまきよよい
松がしむきほおの事はきせ次かきふあゝり
びうきぬすま井よ手うらなうらにわらうらあ
うゆらうおがさぬあらぬ人くもあさうら
あまのいんうらくせんうらあまのいんうら正慶二
年より二月ありおちの記うらこのけうらめ
うらうらうらうらうらうら密教の秘法とうら
まうらあまのいんうらうらぬ日教うらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

ういふこと東山よりよきまもりぬるべし
去りてありけん内大臣殿を以て別当道をも
むの給むと八日のあけのころに
我の家の二条坊門万里小路もなる一海
ありあゆみ入給ふは
うきことふといふ程を
指貴ひとあやうき
をの程りよりあるは
なきこといふ物
せんよめふまされ
は

も
ぬよ
むし
え
ま
あ
又
水
番馬

予乃ものごころふとめりてあはれはたれれども
きくかひえくかきやあつらんしはしよし
腹まりよきとわがきえか河童といひ
きまをまのうへ守山なるんうせふたりとを
きあてあをきくうら下なるはさふあつし
くのい依りて後實の大納言経顯の中納言相定
此中納言資名大納言資明の宰相隆隆おとを
しゆひひた後実資名をなはるるこ
よそりてつとらりて一洗よりしゆりつとせ
しゆし門しゆみとたつしゆしめん
しゆの家ありてねまをてりしゆももも

よぬてはるるやされきかともやぞい
伯耆乃仲而き人しゆりしゆり上達尸夜と
人教きしゆはるるあつしゆも
けふふや尊氏乃は家のしゆり新田小島義
貞といふものいしゆ民乃子守なりありと大将
軍のしゆ武亮國よりいしゆはるるしゆり
あ乃あつしゆれお軍八守邦親とてわし
しゆしゆしゆしゆのしゆり時入道貞顕入道城介
入道圓明長清入道圓基とてしゆり
しゆり高時入道次とてしゆり
しゆりいしゆは入道しゆり大将とてしゆり

五月十四日鎌倉を去りてむらふま境十方陣跡
も村入道のいづう海軍をさすのそころに
ひろりうとくかきううはく海軍の頼朝の世時政
より今より海軍をさす年月をたぬりうり
うりも新田をさすのふま入るまやすすいぞふか
はさるべしとたぬえしは後かく十方かたを
てまかたううはくううとてさすをさす
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを

ぬりのもしはくろい共百騎も十六日の夜よ入
かまらうういれあふりうふ中一日よてかた
わりのあつらひもたぬえしは後かく十方かたを
うちまけられたおあつらひもたぬえしは後かく十方かたを
字宛かまらういれあふりうふ中一日よてかた
世の中いれあふりうふ中一日よてかた
とてまかたううはくううとてさすをさす
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを
あつらひもたぬえしは後かく十方かたを

文政十丁亥年九月廿日於燈下三鏡書寫
事記

中村直道

